

## ドリュ・ラ・ロシエルにおけるヴァリアントの問題 ：『夢見るブルジョワジー』と「シャルルロワの喜劇」

松尾, 剛  
立命館大学法学部准教授

<https://doi.org/10.15017/16858>

---

出版情報 : Stella. 28, pp.119-136, 2009-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# ドリユ・ラ・ロシエルにおけるヴァリエーションの問題 ——『夢見るブルジョワジー』と「シャルルロワの喜劇」——

松 尾 剛

しばらく停滞気味であったドリユ・ラ・ロシエル関連資料の刊行がこのところふたたび活発化している。その先鞭をつけたのは作家の恋人ヴィクトリア・オカンポによる回想録の仏語訳出版（2007年）であった<sup>1)</sup>。みずから主幹を務めた文芸誌『スール』を通じてアルゼンチン文壇を盛り立てただけでなく、マルローやカイヨワらと密な交流をかさねることで仏亜両国の文化交流に重きをなした〈雌牛〉の回想録は、重要性を喧伝されながらも、使用言語の問題から容易には近付きがたいものであった<sup>2)</sup>。その障壁が遅まきながらも取り除かれたのであるから喜ばしいかぎりである。だが同書の価値を高からしめているのは、むしろ付録として掉尾に置かれた10通余りのドリユの手紙ではあるまいか。知人の証言ではなく、直にドリユの肉声に当たれるメリットは大きく、当然のことながら現存書簡を網羅した版の刊行を望む声は高まった。これに応じて本年（2009年）上梓されたのが『過ぎ去りし愛の手紙』である<sup>3)</sup>。同版は電報や送付されずに終わった手紙もふくめ総計101の書簡を収めたもので（うちドリユ書簡は85通）、大西洋を越えて交わされる愛と友情の軌跡はまことに興味深い。

以上はドリユの実生活にかんする刊行物であるが、小説家としての側面についても、新たな光を当てる書が世に問われた。『性に関する小説のための覚書』がそれである<sup>4)</sup>。同書の存在については、早くから研究者たちの言及するところであったが、一般読者に供されるには2008年を俟たねばならなかったのである。なるほどその文学的価値については疑問なしとはせず、簡潔に過ぎるエクリチュールは文体の彫琢を欠き、ピエール・アスリーヌも述べるように、全体的には小説というよりも慌ただしく執筆された草稿を思わせる<sup>5)</sup>。しかしながら、ドリユが自己の性体験を赤裸に綴った本書が、倦むことなく性を語りつづ

けた作家に関心を抱く者にとって必携の書となることは疑えない。これにガリマール出版のリマジネール叢書から復刊された種々の文学作品を加えれば、小説家ドリユ・ラ・ロシエルへのアプローチはずいぶん容易になったと評して差し支えあるまい<sup>6)</sup>。

このように実生活や作品をめぐる資料の刊行が進む一方で、彼の政治思想にかんする研究・出版も行われている。そもそもファシズムへのアンガージュマンを実行したドリユを理解するにあたって、彼の政治思想を無視することは許されない。にもかかわらず『ファシスト社会主義』に代表される彼の主要な時事論集は、今日なお入手困難な状態にある。かてて加えて単行本未収録の記事も多いとなれば、ドリユの政治思想を正確に把握するのはなかなかの難事というのが偽らざる実情だ。このような状況に孔を穿たんとしたのが、ジャン＝バチスト・ブリュノーによる時事論集の出版（2009年）である<sup>7)</sup>。同書はドリユの代表的な政治評論74編を時系列にしたがって収録したもので、斯界の第一人者ジュリアン・エルヴィエが長文の序を寄せている。これにロム・リーブル社から2004年に上梓された『国民革命』を加えれば、ドリユの政治思想もずいぶんと近付きやすいものになったと言えよう<sup>8)</sup>。

以上のような昨今の出版事情を閲するに、畢竟ドリユ・ラ・ロシエルをめぐる資料整備は順調に進行していると言えるだろう。とはいえ新資料の出版が盛んな一方で、既刊テキストにたいする基本的な検証作業はほとんど進んでいない。なるほど上述のように、小説の多くがガリマール出版から復刊されて容易に参照しうる状態にあるのは事実である。しかしながら作品の多くは十分な校訂作業を経ていないため、生成過程は言うに及ばず、プレオリジナル・初版・再版の異同さえ明らかにはなっていないのである。必然的に読者は自分が手にするテキストの信頼性に不安を覚えざるをえない。それが杞憂でないことを示すのが『若きヨーロッパ人』をめぐる問題である。同書は1927年に出版されたものだが、今これに言及しようとするれば、手近な版として1978年刊の『ジュネーヴかモスクワか』との合本が挙げられよう。だが同版が底本としたのは1941年の『初期著作集』に収められた改訂版なのである<sup>9)</sup>。したがって20年代のドリユを研究しようとする向きには、『若きヨーロッパ人』再版は参照テキストとして妥当性に欠けることになる。もちろん、これをもって同版の意義が失われるわけではないし、41年版を底本とした方針が誤りであるわけでもない。

だが少なくとも78年版にのみ依拠したドリユ研究の信頼性が揺らぐことは避けられまい。しかも78年版は初版との異同を明らかにしておらず、かといって27年版の参照も容易ではないため、初版執筆時におけるドリユの政治思想を探るのにはかなりの困難が伴うのである<sup>10)</sup>。

また仮にテキストそのものに問題がなくとも、異文の存在が関心をそそるものであることは論を俟たない。だが我々の好奇心が満たされることはむしろ稀である。たとえば1928年8月から9月にかけて『ルヴュ・ド・フランス』誌に連載された『ブレーシュ』。後に新フランス評論社から単行出版された際に「祈りと恩寵の可逆性をめぐる考察のような重要な加筆」<sup>11)</sup>が施されたことは知られているものの、詳細は現在に至るまで明らかにされず、具体的な情報の収集と分析は各人に委ねられているのが現状である。あるいは『新フランス評論』誌に分載された後、中編小説集『シャルルロワの喜劇』に収められた「ダーダネルスの旅」。これに関しては、前出のエルヴィエが同書文庫版に寄せた序文のなかで、生成上の重要な情報を提供しているが、紙幅の制約から草稿調査の詳細は省かれており、これも具体的な情報は未詳とせざるをえない<sup>12)</sup>。まさにドリユ研究者にとっては隔靴搔痒である。

以上を要するに、「今日ドリユの長編や中編小説は幸いなことに広範にわたって普及している」<sup>13)</sup>にもかかわらず、テキスト本体の検証は不十分なままと断じざるをえない。かくのごとき状況に鑑みれば、彼の作品における初出および初版のテキストを比較・照合する意義は否定しがたいものと思われる<sup>14)</sup>。本稿の目的は、そのような作業の重要性を具体的な作品分析を通じて提示することにある。そこで我々はまず『夢見るブルジョワジー』のプレオリジナルを検討することで、ドリユ研究においてもヴァリエーションの検証が十分に生産的な作業であることを示す。しかる後に彼の最重要作品のひとつである「シャルルロワの喜劇」について、プレオリジナルと初版テキストの異同を検討し、その推敲過程に作家の特質が顕れていることを明らかにする。

\*

ドリユの〈家族小説〉として名高い『夢見るブルジョワジー』は『新フランス評論』1936年12月号から翌年の2月号にかけて連載された後、ガリマール

出版から刊行された。もちろんこの大作が3回の連載に収まるはずはなく、実際は全5章のうち最後の2章を独立した作品のごとくに掲載したものである。

本作はいわば仮装された自伝であり、いきおい作家の実体験を反映した書と見なされがちであった。だが題名が示すように、ファシスト作家によるブルジョワ社会批判としての側面があることを忘れるべきではない。著者の批判精神を如実に表しているのが登場人物たちの名前である。フランシーヌ・デュガ=ポルトやジャック・ルカルムの指摘を俟つまでもなく、『夢見るブルジョワジー』には明白な象徴性を帯びた人物名が数多く登場する<sup>15)</sup>。しかもその多くは各人の性質を揶揄するのが目的としか思えない代物だ。男性的精力を誇る主人公カミーユ Camille の名は内奥に秘められた女性性を暗示し、彼の犠牲となる妻アニェス Agnès のそれは、か弱き雌仔羊 agnelle を想起させる。他にも嫌悪・醜悪という響きをもつル・ロルール Le Loreur、あたかも肉体をもたぬがごとき恋人ニコール Nicorps、その名に反ユダヤ主義感情を込められたベン・アブラム Ben Abram、そのものずばりクズという名を持つルビュ夫人 Madame Rebut 等々、ほとんどすべての登場人物名に作者の批判と諧謔を読みとることが可能なのである<sup>16)</sup>。

なるほど一般的にいつて、人名研究は確たる証拠を欠き、それゆえ恣意に陥りやすいのは、ルカルムも示唆するとおりでらう<sup>17)</sup>。しかしながらドリユの小説に話を限れば、そうとばかりも言えない。というのも、自伝的作品の主人公を常にジルと命名したことからも推察されるように、彼自身が登場人物の名に強いこだわりを持っていたと考えられるからだ。しかもそれらの名前に言葉遊びやアナグラムとしか思えないものが散見するとなれば、ドリユにおける人名研究もあながち無意味とは言えまい。たとえば前述のジル Gille / Gilles が「私=彼 je-il」に由来しているとの説は首肯しうるものであるし、「シャルルロワの喜劇」に登場するプラジャン夫人 Pragen の名に金銭 argent のアナグラムを見るのは、彼女の行動から考えて自然である<sup>18)</sup>。

そこで注目したいのが、『夢見るブルジョワジー』の主人公カミーユ・ル・ベスネルの恋敵ギュスターヴ・ガンシュである。同作の登場人物の多くが象徴的な名を持つ以上、物語で重要な役割を果たすガンシュの姓にも何らかの意味を探るべきであろう。これに関して前出のルカルムは「この左翼の大作はアニェスを救うことも誘惑することもできない。なぜなら彼は、鼻風邪と鼻カタルが

原因ですべてのチャンスを台無しにすると同時に、間抜けであるとの印象を与えてしまうからだ<sup>19)</sup>と述べ、ガンシュ Ganche の名が左翼 gauche / 台無しにする gâcher / 間抜け ganache と関連することを指摘している。なるほど物語内容に照らせば、この解釈は十分に説得的だ。とはいえ人名解釈は容易には証拠を見出せず、いきおいルカルの論も恣意的との批判を招きかねないのは上述の通り。だが『夢見るブルジョワジー』のプレオリジナルを検証することで、明白な証拠とまでは言えずとも、傍証を得ることはできるのだ。

雑誌連載の初回冒頭で語り手は、父母の出会いと夫婦生活を略述する。そこで注目すべきは、アニェスに懸想した男性の名前がガンシュではなくゴーシェとされている点である――

ル・ロルルとギユスターヴ・ゴーシェ Gustave Gaucher という2人の男がママに恋して、代わるがわるに言い寄っては、パパの手から彼女を奪い去ろうとしても、無駄なことでした。パパはいつでもママを取り返したのです。<sup>20)</sup>

しかしながらゴーシェなる姓が現れるのは引用部分だけであり、初版テキストにおいてのみならずプレオリジナルにおいても、彼は一貫してギユスターヴ・ガンシュ Gustave Ganche と呼ばれている。あたかも書き間違いのごとくにドリユのペンからこぼれ落ちたゴーシェという姓が、ギユスターヴを命名するに際してガンシュと並ぶ最終候補であったことは想像にかたくない。さて、そのゴーシェ Gaucher なる名は、いうまでもなく読者に「左翼 gauche」を連想させる。ここから推論されるのは、ガンシュ Ganche なる姓の由来が「左翼 gauche」にあることだ。じじつ、「左翼」の3文字目 u を逆さまにして n とすれば、ガンシュの文字が立ち現れる。とすると、ギユスターヴの姓は彼の政治信条を表す用語に起因するというのが最も妥当な推論であろう。

ドリユ研究において初出テキストの重要性はもはや否定できない。その点を確認したうえで「シャルルロワの喜劇」におけるヴァリエントの検証に移ろう。

\*

小説集『シャルルロワの喜劇』の劈頭を飾る同名の中編は、ジャン・ゲーノが編集長を務める月刊誌『ユーロップ』1933年5月号と6月号に分載された後、

翌年初頭には第1次世界大戦をテーマとした他の小説とあわせてガリマール出版から上梓された<sup>21)</sup>。ドリユの原体験を語った最重要作品として広く認知された中編小説であるが、筆者の承知するかぎり、今日にいたるまで初出誌と初版本におけるテキスト間の異同が指摘されたことは一度もない<sup>22)</sup>。本稿がヴァリエーション問題を検証するにあたり、特に「シャルルロワの喜劇」(以下「喜劇」と略記)を取りあげる所以である。

まずはごく簡単に作品の梗概をまとめておこう——。時は1919年7月。語り手である〈私〉は第1次世界大戦の帰還兵である。兵役を解かれた彼は、死せる戦友のユダヤ人クロード・プラジャンの母マドレーヌに秘書として仕えることで糊口を凌いでいる。息子が落命した地を見たいとの希望に従い、語り手は雇い主に付き添って旧戦場シャルルロワに帰ってくる。そこで主人公は突然、戦場の生々しい記憶に捕らえられ、突撃時の陶酔とその後を訪れた幻滅を想起する。その夜、戦没者墓地からクロードの(と推定される)遺体を掘り起こし、改めて鎮魂のミサを施したプラジャン夫人は、〈私〉に代議士に立候補することを奨め、そのための金銭的援助も申し出る。しかしながら革命を熱望する主人公が現体制に組み込まれることを肯うはずもなく、夫人の提案は冷たく拒絶されて物語は幕を閉じる……。

作者自身が「私の本では最も悪くない」<sup>23)</sup>と自賛し、研究者からも高い評価を得ている『シャルルロワの喜劇』<sup>24)</sup>。なかでも冒頭を飾る本作は、ドリユの本質を明かす作品として頻繁に言及される小説だが、すでに述べたように初出テキストと初版との異同を比較・検討した研究はいまだ存在しない。しかしそれも無理からぬことで、プレオリジナルと初版との異同は、誤植や句読点に関するものを除けば40あまりの微細な文体上の修正にとどまり、作品全体の読解を変更させるものではない。にもかかわらず本稿が両版の異同を取り上げるのは、ユダヤ人をめぐる言説への加筆修正には、単なる文体上の配慮を超えて、作家の本質的特徴である両義性の問題が顕れていると考えるからだ。このような前提的了解のもと、本稿ではユダヤ人にかんする言説を主たる対象として「喜劇」のヴァリエーションを検証したい(以下、「喜劇」からの引用では、『ユーロップ』誌掲載テキストにのみ存在し、初版では削除された箇所を〔 〕で、逆に初版で加筆された部分を〈 〉で示す)。

そもそも「喜劇」におけるユダヤ人の表象には、人種差別思想に貫かれた『ジ

ル』ほどではないにせよ、相当な悪意が見てとれる。その典型が、コスチュームプレイよろしく看護婦の制服を身にまとい、全身を勲章で飾り立ててシャルルロワに向かうプラジャン夫人の描写である。車中では聞こえよがしに当地の市長や有名政治家ボンシュールの友人であることを口にする裕福なユダヤ人女性プラジャン夫人。彼女を「無味乾燥な虚栄心」[25]の塊と見なし、「名声への情熱こそがマドレーヌ・プラジャンの性情における本質的特徴」とする主人公の辛辣な視線は、反ユダヤ主義と無関係とは言い切れまい<sup>25)</sup>。だが、それだけではない。カトリックに改宗することで、幾世代も前からフランス人であったかのように振るまっていると夫人を嘲笑する語り手の口吻には、「ユダヤ人にはけっして同化を認めない根底的な反ユダヤ主義、少なくとも反同化主義の底の気分」<sup>26)</sup>が顕れている。初版刊行に際して加えられる修正もまた、プラジャン夫人の人間的欠陥を強調する方向で進められる――

哀れなチビのクロード。彼女が彼をひどくやせ細った男にしてしまったのだ。なのに彼女はすぐにもボンシュールを範と仰いで、乱暴なまでに早く出世させようとしたのだ。〈彼女は息子が虚弱であることに目をふさぎ、軍人になることを望んでいたのである。〉[プレ 53 / 初版 12]

クロードを軍人と望む夫人の意志を強調する初版テキストは、何にもまして虚栄心を優先する残酷な母の肖像を描き出す。なるほど、この加筆は情愛の欠如した母にたいする揶揄であり、これを反ユダヤ主義的な改変とするのはいささか強引な解釈かもしれない。ならば次の例はどうだろう。激しい砲撃のさなかに、戦友ジャコブが塹壕から身を乗り出してしまう場面である――

ジョゼフ・ジャコブ。彼は〔善良で太った〕ユダヤ人だった。いわゆるユダヤ人である。ユダヤ人とは何だろう？ 誰もそれを知らない。なのに人はそれを話題にする。〈個人として見れば、彼は〕平和主義者であり、〔たいして〕〈それほど〉策略家でもなく、かなりの美青年だが、ひどく下品で、繊細ではなく、まったくもって知的ではなかった。[プレ 215 / 初版 67]

ここで注目すべきは「善良で太った bon gros」という 2 語の削除である。まず形容詞「善良で」を削除することでジャコブの性質からは肯定的側面が奪われ、下品で無教養という否定的特徴が強調されることになる。ここに看取されるのは、好ましからざるユダヤ人像を提示せんとする人種主義者ドリユの姿である。



次の形容詞「太った」が消去されたのは、ジャコブから具体性を剥ぎ取ることで、「喜劇」が問題とするのは個々別々のユダヤ人ではなく、いわば大文字のユダヤ人であること（「ユダヤ人とは何だろう？」）を明確にするためではあるまいか<sup>27)</sup>。「個人としてみれば、彼は Personnellement, il était」と加筆されるのも、平和主義はあくまでジャコブ個人の思想にすぎず、けっしてユダヤ人の一般的性向ではないことを強調するためと考えられる。じじつ「喜劇」が描き出すユダヤ人は平和を志向しない。むしろ彼らは「強制された愛国心」<sup>28)</sup>から戦場へ赴く好戦家なのである。こうしたユダヤ人像が明確になるのが、プラジャン夫人に代議士への立候補を奨められた主人公が大戦の意味を自問しつつ、クロードの死について考えをめぐらせる場面である――

それにしても、なぜクロードは殺されたのだろうか？ 私にわかるだろうか。フランスのためだ。おそらく彼は〈フランスのために戦ったのだ〉。なぜなら彼はユダヤ人なのだから。〈だが、私は？〉科学と工業の嵐のなかで私の誇りは打ち砕かれた。それでもまだ軍人の栄光を信じるなどできない相談だ。[プレ 239 / 初版 67]

初版における加筆が無くとも、独白内容に大きな違いはあるまい。しかしながら、「フランスのために戦ったのだ a combattu pour la France」との一句が挿入されることで、クロードの死が愛国心に基づくものだったことが強調されるのである。ところが今のフランスは「右翼も左翼も老いてしまった」[96] 国であり、革命を待望する主人公には否定の対象でしかない<sup>29)</sup>。老人たちの共和国に命を捧げたクロードと、「私は老人たちに反対なのです」と革命願望を語る主人公との対照を、「だが、私は？ Mais moi？」の加筆がいつそう際立たせている。くわえてドリユは、ユダヤ人が生命を賭けて守らんとする祖国を、ことさらに醜悪なものとして描き出そうと、次のような修正を施している――

ともかくも 1914 年 8 月 24 日に話を戻そう。その日の私は、初めて出現した必然性に、必然性が身を借りたグロテスク〈で屈辱的〉な者たちに〈――口髭を生やした大尉、赤いズボンをはいたフランス――〉猛烈に反抗していた。[プレ 220 / 初版 76]

大量動員を旨とする近代戦では、新米兵士の〈私〉がいかにも勇敢であれ、戦場経験が長いだけの、必ずしも有能とは言い難い人物を上官に戴かねばならないことがある。じじつ、話者の前に現れたのは無能なエチエンヌ大尉である。こ

の人物をフランスと同一視することで（「口髭を生やした大尉、赤いズボンをはいたフランス un capitaine moustachu, une France en pantalons rouges」）、兵士たちが仕える祖国の価値は貶められる。さらに「グロテスクで屈辱的 grotesques et humiliantes」と重ねられた形容詞が、フランスの醜さを強調する。かくして共和国の価値は否定され、それに命を捧げるユダヤ人もまた愚かな愛国者として揶揄の対象となるのである。

これまでの検討をまとめれば、「喜劇」における書き換えは作者の反ユダヤ主義に裏打ちされていると結論するほかあるまい。以下の加筆もまたユダヤ人嫌悪の発露を示す好例である（文中「彼」はエチエンヌ大尉を指す）——

キリスト教徒とは何だろう？ ユダヤ人を信じる人間だ。彼はユダヤ人の〈ものと彼が思っている〉神を信じていた。そうであるがゆえに、彼はユダヤ人たちを賛嘆まじりの憎悪で包み込んでいた。[プレ 215 / 初版 67]

初出時には単に「ユダヤ人の神 un dieu juif」とされていたキリスト教の神を、「ユダヤ人のものと彼が思っている神 un dieu qu'il croyait juif」と書き換えるドリユの意図は明らかだ。それはキリスト教をユダヤ起源から切り離そうとする操作にほかならない<sup>30)</sup>。ここから「大聖堂のキリストよ、白く雄々しき偉大なる神よ、王の息子たる王よ」との叫びで結ばれる『ジル』までは、わずかな距離しかない<sup>31)</sup>。

以上、本節で見てきた加筆修正は、語り手の反ユダヤ主義をテキストの表面に露出させるために施されたものであった。しかしながら「喜劇」の修正作業のなかには、それとは逆に、むしろ人種差別思想を隠蔽する方向で行われたものも少なからず存在するのである。そこで次に、ユダヤ人憎悪を文面から消去しようとするドリユの配慮を見ていこう。

\*

戦争が終結する以前のこと、クロードの死を受け入れられないプラジャン夫人は、息子はドイツ軍の捕虜になったとの噂を信じ込もうとする<sup>32)</sup>。〈私〉によればそれはまったくのデマであり、悲嘆に暮れるプラジャン夫人に偽りの希望を与えて礼金をせしめようと目論む者たちが捏造した話にすぎない。にもか

かわらず、一縷の望みにすぎる夫人は、息子はドイツ軍に連れ去られたと信じて、消息を掴もうとあらゆる手段に訴えるのである——

これについては、ブラジャン夫人は陸軍大臣、外務大臣、スペイン王、法王、および  
[あらゆるユダヤの長老たち]〈その他あらゆる者たち〉を動員して、シャルルロワと  
マルヌの狭間で集められた人の群れから、哀れなクロードの亡霊を探し出そうとした。  
[プレ 73 / 初版 39]

ドリユは「あらゆるユダヤの長老たち tous les rabbins」を、「その他あらゆる者たち tous les autres」と書き換えることで、ブラジャン夫人の民族性を消し去っている。「あらゆるユダヤの長老たち」を動員する人種の側面を失った初版テキストの夫人は、もはや愛息の行方を探すために八方手を尽くす健気な母親でしかないのである。

さらに直截な例としては、アルジェリアから来たユダヤ人ベンシモンにかんする描写の削除があげられよう。頭部に負傷した主人公は半ば錯乱状態のまま、戦友ベンシモンにオランダへの逃亡を持ちかける。このままでは普仏戦争の二の舞である、フランス兵はみな卑劣漢で臆病者だ、こんな連中は見捨てるべきだと叫ぶ主人公。これに対して——

「だまれ」とベンシモンは言った。「おまえ、おかしいぞ。頭に一発食らったな」  
[彼は我々の周囲を見渡した。彼は恐れていた。この種の考えに巻き込まれて危険なのは、誰よりもユダヤ人なのだから]  
「すぐに良くなる」と彼は私に繰り返した。[プレ 234 / 初版 91]

削除箇所に入れられていたのは、ユダヤ人は己の厭戦的言動が招来しかねぬ災厄を恐れるがゆえに戦場に赴いたのであって、けっして自発的爱国心から出征したのではないとする反ユダヤ主義的思考である。だとすれば、これを作品から消去する目的は、語り手のユダヤ人嫌悪を隠蔽することにあつたと考えるほかあるまい。

人種差別臭を消し去ろうとするドリユの姿勢を端的に物語の改変を今ひとつ指摘しておきたい。シャルルロワに到着した一行を町の名士たちが歓待する場面である。歓迎ムードに満たされるなか、ひとり主人公だけは夫人の容貌をあげづらい、細長い顔からは小さな耳が突き出、指の肉はそげ落ちていると内心で嘲笑する——

つまり、もし彼女に「ユダヤ人種の烙印」〈ユダヤ人の特徴〉がなかったとしても——項は少々曲がっているし、腰もたるみ気味だ——貴族街でしばしば見られるような特徴は残っていたことだろう。[プレ 55 / 初版 15]

初版テキストの「ユダヤ人の特徴 les signes juifs」に対し、プレオリジナルにおける「ユダヤ人種の烙印 les stigmates de la race juive」が持つ暴力性については多言を要すまい。「人種」という直截な言葉に加えて、内部に潜む「不快なもの、耐え難いもの、卑しいものの目に見える顕れであり、明白な標」を意味する語「烙印」が使用されているのであるから<sup>33)</sup>。この2語の結びつきから生じる暴力性は、「ユダヤ人の特徴」という平板な表現に置き換えられることで消去される。こうして当時のナチスを連想させかねぬ初出テキストの人種主義は隠蔽されることになったのである<sup>34)</sup>。

以上は、いずれも初出誌掲載テキストが有していた人種思想を抑圧し、テキスト全体を覆う反ユダヤ主義を消去する方向で行われた改変と言えるだろう。だがそうだとすると、前節で跡付けた反ユダヤ主義を強化せんとする修正とは明らかに齟齬をきたしていると言わざるをえない。「喜劇」における人種主義の強化と隠蔽。そこに看取されるのは、反ユダヤ主義的な改変を行いながら、しかし同時に差別的な言述を削除することで人種思想を隠蔽しようとする小説家ドリユ・ラ・ロシエルの曖昧な姿なのである。

ここで想起すべきは、「喜劇」における両義性の問題であろう。それは幾人もの研究者が指摘してきた「喜劇」の本質である。たとえばジュリアン・エルヴィエは、何物にも与することなく、常に冷静な態度を保持せんとする語り手のダンディズムゆえに、同作はファシストと反ファシストとを均しく魅惑する両義的な小説となったことを指摘している<sup>35)</sup>。あるいはマルク・ダンブル。彼はジャンケレヴィッチのイロニー論を援用しつつ、突撃の描写に見られる抒情の爆発とそれを相対化する語り手の諧謔とが共存しているところに、作品の成功要因を見た<sup>36)</sup>。そもそもエルヴィエも指摘するように、ひとり「喜劇」のみならず、ドリユその人が「捉えがたく、両義的な人間であり続けている」<sup>37)</sup>ことを忘れてはなるまい。だからこそジャン＝フランソワ・ルーエットは、ドリユの小説に頻出する「犬」をキーワードとして、諸個人が結合した有機的な社会を夢見つつも、あらゆる社会参加を拒絶する両義的なドリユの精神を剔抉しえたので

ある<sup>38)</sup>。

これらの先行研究の成果に照らすならば、「喜劇」の推敲過程に見られる人種主義の強化と隠蔽の共存は、ドリユの本質ともいべき両義性の顕れにはかならないと考えられよう。テキストを反ユダヤ主義に染め上げることも、また作品から消し去ることもできないドリユ。それこそが「喜劇」の修正作業から垣間見られる作家の姿であった。それは一貫した解釈を拒む矛盾に満ちた改稿ではある。しかしながら相反する欲求に引き裂かれた姿こそがドリユの変わらぬ自画像である以上、「喜劇」の改稿過程が矛盾に満ちて一貫性を欠くものであっても、なんら怪しむに足りない<sup>39)</sup>。むしろこの一貫性の欠如こそが、思想的両義性というドリユの基本的特質の顕れなのである。

\*

以上、『夢見るブルジョワジー』と「シャルルロワの喜劇」のヴァリエントを検証した結果、前者にかんしては登場人物名の由来を同定し、後者についてはテキストの変遷からドリユ特有の両義性を浮かび上がらせることができた。むろん従来解釈を大きく変える類のものではないが、テキストの比較・照合すら満足に行われていないドリユ研究の現状に鑑みれば、少なくとも新たな角度から作品の読みに厚みを加えたという点ではそれなりの成果と呼べるのではあるまいか。

註

- 1) Victoria OCAMPO, *Drieu, suivi de lettres inédites de Pierre Drieu la Rochelle à Victoria Ocampo*. Avant-propos et notes de Julien HERVIER, traduit de l'espagnol par André GABASTOU, Paris: Éd. Bartillat, 2007.
- 2) オカンポの生涯については、次の単行書を参照——Laura AYERZA DE CASTILHO et Odile FELGINE, *Victoria Ocampo*. Préambule d'Ernesto SABATO, Paris: Criterion, 1991. 付言すれば、彼女がカイヨワと交わした往復書簡がストック社より刊行されている (Roger CAILLOIS et Victoria OCAMPO, *Correspondance (1939-1978)*). Lettres rassemblées et présentées par Odile FELGINE avec la collaboration de Laura AYERZA DE CASTILHO et l'aide de Juan ALVAREZ-MARQUEZ, Paris: Éd. Stock,

- 1997)。
- 3) Pierre DRIEU LA ROCHELLE et Victoria OCAMPO, *Lettres d'un amour défunt. Correspondance 1929-1944*. Édition établie, présentée et annotée par Julien HERVIER, Paris : Éd. Bartillat & Editorial Sur, 2009.
  - 4) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Notes pour un roman sur la sexualité, suivi de Parc Monceau*. Édition établie et présentée par Julien HERVIER, Paris : Gallimard, 2008.
  - 5) Voir l'article du 15 avril 2008, «Sexualité de l'homme couvert de femmes», dans le blog de Pierre ASSOULINE, «La République des Livres» (<http://passouline.blog.lemonde.fr>).
  - 6) 参考までにリマジネール叢書から再刊されたドリユの作品を叢書番号に従って列挙しておく——『戸籍』『不愉快な物語』『ペルーキア』『馬上の男』『女たちに覆われた男』『夢見るブルジョワジー』『シャルルロワの喜劇』『わらの犬』『ブレーシユ』。また他の出版社からは長編評論『今世紀を理解するための覚書』も再刊されている (Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Notes pour comprendre le siècle*, Paris : Éd. du Trident, 2005)。
  - 7) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Textes politiques 1919-1945*. Présentation de Julien HERVIER, et édition établie et annotée par Jean-Baptiste BRUNEAU, Paris : Krisis, 2009.
  - 8) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Révolution nationale. Articles parus dans «Révolution nationale» (mai 1943 - août 1944)*, Paris : Éd. de l'Homme libre, 2004.
  - 9) Voir Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Le Jeune Européen* suivi de *Genève ou Moscou*. Préface de Dominique DESANTI, Paris : Gallimard, 1978, p. 10.
  - 10) これに関しては、次の研究書が両版の異同を細かく指摘している——有田英也『政治的ロマン主義の運命——ドリユ・ラ・ロシェルとフランス・ファシズム』, 名古屋大学出版会, 2003年, 126-129頁。
  - 11) Julien HERVIER, «Préface» à *Blèche*, Paris : Gallimard, coll. «L'Imaginaire», 2008, p. 13.
  - 12) Voir Julien HERVIER, «Préface» à *La Comédie de Charleroi*, Paris : Gallimard, coll. «L'Imaginaire», 1996, p. 14.
  - 13) HERVIER, «Présentation» des *Textes politiques 1919-1945*, *op. cit.*, p. 11.
  - 14) もちろんドリユ作品におけるヴァリエーション研究は皆無ではない。たとえば小説『馬上の男』については詳細な草稿研究が公刊されている (Thomas M. HINES, *Le Rêve et l'action : une étude de «L'Homme à cheval» de Drieu la Rochelle*, Columbia / South Carolina : French Literature Publications Company, 1978)。また『ファシスト社会主義』に収録された論説の改稿過程からテキストに込められた政治的メッセージを読みとろうとする試みも存在する (有田前掲書, 207-209頁)。
  - 15) Voir Francine DUGAST-PORTES, «*Rêveuse Bourgeoisie* : une esthétique de la désillusion», in *Drieu la Rochelle écrivain et intellectuel*. Textes réunis par Marc

- DAMBRE, Paris: Presses de la Sorbonne nouvelle, 1995, p. 204; Jacques LECARME, *Drieu la Rochelle ou le bal des maudits*, Paris: PUF, coll. «Perspectives critiques», 2001, pp. 175-177.
- 16) ここで言及した人物名の由来に関する推測は、その多くをルカルムの研究に負っている (voir LECARME, *op. cit.*, pp. 175-177)。
- 17) *Ibid.*, pp. 175 et 177.
- 18) Voir Jean-Marie PÉRUSAT, *Drieu la Rochelle ou le goût du malentendu*, Frankfurt am Main / Bern / Las Vegas: Peter Lang, coll. «Europäische Hochschulschriften», 1977, pp. 102-110; Jean-Louis CORNILLE, «Maladroites écritures. Pierre Drieu la Rochelle», *Littérature*, n° 60, décembre 1985, pp. 11-12; Marc DAMBRE, «“La Comédie de Charleroi”: un lyrisme dans l’ironie», *Roman 20-50*, n° 24, décembre 1997, pp. 56-57.
- 19) LECARME, *op. cit.*, p. 177.
- 20) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, «Réveuse Bourgeoisie (I)», *La NRF*, n° 279, décembre 1936, p. 1015. もちろん、「ゴーシェ」が「ガンシュ」の誤植である可能性も完全には排除できない。しかしながら筆者はその立場を取らない。というのも両者の綴りを見ればわかるように、植字工が Ganche を Gaucher と綴り間違えるには n を u と取り違えたうえ、さらに語末に本来存在しない r を付加せねばならず、このような二重のミスが同一単語上に現れる可能性は決して高くはないと考えられるからだ。
- 21) プレオリジナルと初版のレフェランスはそれぞれ以下の通り—— Pierre DRIEU LA ROCHELLE, «La Comédie de Charleroi», *Europe*, n° 125, mai 1933, pp. 50-79 et n° 126, juin 1933, pp. 200-239; id., *La Comédie de Charleroi*, Paris: Gallimard, 1934. 両版からの訳出・引用はすべて拙訳により、出典を引用末尾の [ ] に「ブレ / 初版」として頁数と共に示す。ただし両版間に異同がなければ、参照が容易なりマジネール版の頁数を [ ] に示す。その際、同一頁からの引用が連続する場合には、最初の引用にのみレフェランスを記す。
- 22) 浩瀚なドリユ書誌をものしたジャン・ランサルにしても、初出誌が『ユーロップ』であることの指摘にとどまり、その異同については言及していない。Voir Jean LANSARD, *Drieu la Rochelle. Bibliographie générale*, Paris: Aux Amateurs de Livres, coll. «Mélanges de la bibliothèque de la Sorbonne», 1991, p. 53.
- 23) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Journal 1939-1945*. Édition établie, présentée et annotée par Julien HERVIER, Paris: Gallimard, coll. «Témoins», 1992, p. 110. 本作に対する自負は早くも執筆直後から現れており、1933年の夏に書かれたと推測される手紙のなかでも、ドリユは「戦争に関する6つの中編を集めた新作『シャルロワの喜劇』を完成させた。僕はこの作品に非常な満足を覚えているし、周囲も大変な賛辞を寄せてくれている」/「戦争にかんする6つの中編を集めた本をまもなく刊行予定。この『シャルロワの喜劇』という本を、僕はじつに重要なものと考え

ている（ジッドも賞賛してくれた）」とヴィクトリア・オカンボに書き送っている（DRIEU LA ROCHELLE et OCAMPO, *Lettres d'un amour défunt. Correspondance 1929-1944, op. cit.*, pp. 144 et 146）。

- 24) 「もしドリユが紙の上のファシズムで満足していられたら、現実の先駆的ファシズムやナチ占領下の従属的ファシズムなど冷ややかにやりすぎせたのではないかと思われるほど、この作品は高い完成度を持っている」（有田前掲書、234頁）。
- 25) 〈私〉の語るマドレーヌの結婚経緯にも作者の悪意が見てとれる。話者によれば、ブラジャン夫人は別の女性に恋していた夫の気を引くため過激なダイエットを実行した。ブラジャン氏は「男に対しては強かったが、善良さゆえに女性には気弱だった」[25] ことから、「この顔色の悪い野心家の女」を受け入れたという。そのうえ〈私〉は、「かくて我が女主人はブラジャンの親友ボンシュールの残した足跡に身を滑り込ませ、もうけっしてそこから離れようとしなかった」と語り、この結婚が欲得尽くのものであったことを暗示している。なお、作中のクロードがドリユの友人アンドレ・ジェラメック（1914年8月23日シャルルロワにて戦死）をモデルとしていることはよく知られているが、その母ブラジャン夫人もまたアンドレの母をモデルとしている。1920年8月に彼女を伴ってシャルルロワを訪れたドリユが「こんなベルギー旅行に出たことをひどく後悔しているよ。恥ずべき喜劇に一度ならず身を投じるなんて、アンドレの思い出を侮辱してしまった」と妻に書き送っているところをみれば、編者の言を俟つまでもなく、この小旅行が「喜劇」の着想源となったことは確実である。Voir Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Correspondance avec André et Colette Jéramec*. Présentée par Gil TCHERNIA et Julien HERVIER, Paris: Gallimard, 1993, p. 549.
- 26) 有田前掲書、254頁。
- 27) オカンボはドリユが人間を典型の鑄型にはめて理解しがちであったことを証言している——「彼は《典型》を創造する欲求に憑かれていました。もしある人がユダヤ人であればその人はユダヤ人を、すなわち、おそらくは彼にまったく縁遠い価値観を体現していることになるのです。若い娘も、姦婦も、売春婦も同じです。それに加えて、おそらくはフランスやドイツのファシストのみならず、対独協力者の典型も存在したのでしょう。ですから個人は典型に合致せねばならなかったのです。それこそが、デカダンスに入り込みながらも、それを憎んだあの人のもっていた秩序への欲求だったのです」（Dominique DESANTI, *Drieu la Rochelle ou le séducteur mystifié*, Paris: Flammarion, 1978, p. 302）。
- 28) 有田前掲書、253頁。
- 29) シャルロット・ワルデイの指摘に従うならば、共和国のフランスを軽蔑する「喜劇」の語り手は、「大革命と同時に社会生活に開眼したユダヤ人が、手に入れた権利を守るために戦う」ことは理解しつつも、自身がこの戦争で命を落とすことは拒絶するのである。Voir Charlotte WARDI, «Drieu et les Juifs», *Herne*, n° 42, 1982, pp. 291-292.



- 30) 多くの研究者が指摘するように、ドリユが宗教史に示し続けた関心は、その起源からユダヤ教を排除することでキリスト教をアーリア至上主義に回収しようとする試みにほかならなかった。Voir DESANTI, *op. cit.*, p. 344; Julien HERVIER, *Deux individus contre l'histoire. Drieu la Rochelle, Ernst Jünger*, Paris: Éd. Klincksieck, coll. «Bibliothèque du XX<sup>e</sup> siècle», 1978, pp. 367-369; Bénédicte BAUCHAU, «Le "Gilles" de Pierre Drieu la Rochelle ou l'illusion d'un paganisme chrétien», *Studi francesi*, septembre-décembre 1989, pp. 477-482.
- 31) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Gilles*, Paris: Gallimard, coll. «Folio», 1973, p. 687. エルヴィエも指摘するように、「王の息子」という言葉は明らかにゴビノーの用語を踏まえている (voir HERVIER, *Deux individus contre l'histoire. Drieu la Rochelle, Ernst Jünger*, *op. cit.*, pp. 367)。とするならば「白く雄々しき偉大なる神」との表現もまた、人種思想との関連から理解されるべきであろう。
- 32) この種の流言飛語はドリユの創作というよりも、当時のフランスですいぶんと語られたものであったらしい。第1次世界大戦における未帰還兵の死亡確認は困難を極めたため、肉親の死を受け入れられない家族の間では、ドイツにおける秘密キャンプの存在がまことしやかに噂された。戦死したと見なされているフランス人兵士の多くは外部との交信を禁じられて、収容所に隔離されていると信じられたのである (voir Jean-Yves LE NAOUR, *Le Soldat inconnu. La Guerre, la mort, la mémoire*, Paris: Gallimard, coll. «Découvertes», 2008, pp. 22-23)。付言すると、帰還兵がユダヤ人家族に金を無心するという「喜劇」の結末もまた、戦後のフランスでしばしば見られた光景であったようだ。たとえばモンテルランは、エッセー集『死と生』の劈頭に配された「戦場の小さなユダヤ人」(1927年)において、戦死したユダヤ人モーリス・レブシジェの家族を訪ねる〈私〉の経験を語っている——生前のモーリスについて詳しく知りたいとの思いからレブシジェ家を訪う〈私〉を遺族は冷たく追いつ返す。3人の息子を戦争でなくした夫人は、死者の戦友と称する者たちからの金の無心や職の斡旋依頼に疲れ果てており、畢竟〈私〉はその同類と見なされたのである (voir Henry de MONTHERLANT, «Un petit juif à la guerre», *Mors et vita*, in *Essais*. Préface de Pierre SIPRIOT, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1963, pp. 467-497)。ちなみに筆者は「喜劇」の物語設定は無名兵士の墓のパロディであると考えている。とりわけ墓地から複数の死者を選び出し、任意のひとつを聖別してミサを施す行為は、無名兵士の凱旋門埋葬に他ならないと考えるものであるが、その詳細な検討は他稿に譲りたい。
- 33) これに対し「特徴 signe」とは「人物や事物の識別を可能にする要素」を意味するに過ぎない (voir *Trésor de la langue française. Dictionnaire de la langue du XIX<sup>e</sup> et du XX<sup>e</sup> siècle (1789-1960)*. Publié sous la direction de Paul IMBS, Paris: CNRS-Gallimard, 1992, t. 15, pp. 490 et 952)。
- 34) とはいえ「喜劇」を推敲するドリユに、ナチスへのシンパシーがなかったとは考えにくい。というのも、別の修正箇所からはドイツに対する共感が読みとれるからだ。

次の引用は、語り手が迫り来る敵軍におびえながらも、普仏戦争以来敗走を重ねる祖国と対比してドイツ国民を称える場面である——「私は〔イギリスとドイツにいたことがある。〕〈ドイツに立ち寄ったことがある。〉そしてその労働と人間とに感心したものだ」〔プレ 223 / 初版 90〕。イギリスの国名を削除し、ドイツ一国を賞賛する述懐に変更したことは、当時の国際情勢に鑑みれば決して無垢なものではありえない。

- 35) Voir HERVIER, «Préface» à *La Comédie de Charleroi*, *op. cit.*, p. 14.
- 36) Voir DAMBRE, *art. cité*, pp. 45-58.
- 37) HERVIER, *Deux individus contre l'histoire. Drieu la Rochelle, Ernst Jünger*, *op. cit.*, p. 359.
- 38) Voir Jean-François LOUETTE, «Deux chiens dans un homme: le cynisme dans *La Comédie de Charleroi*», *Roman 20-50*, n° précité, pp. 17-30. 伝統的分類には馴染みにくい『喜劇』の特質はイデオロギー上の両義性と密接な関連があるとする次の論稿も興味深い—— Catherine DOUZOU, «L'Ambiguïté générique et idéologique dans *La Comédie de Charleroi*», *ibid.*, pp. 5-15.
- 39) 周知のとおり、ドリユの処女詩集『審問』の劈頭を飾る第1詩編・第1行は「夢と行動」である (voir Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Interrogation*, Paris: Éd. de la NRF, 1919, p. 9)。また「完璧であり、一語たりとも変更不可能で、ドリユの新たな神話を内包した作品」(DESANTI, *op. cit.*, p. 150)、あるいは「彼の運命を最もよく照らし出すテキストのひとつ」(Pierre ANDREU et Frédéric GROVER, *Drieu la Rochelle*, Paris: Hachette, 1979, p. 326) と評される中編小説「二重スパイ」は、共産主義者と皇帝主義者のいずれにも引きつけられた結果、みずから望んで両陣営の裏切り者となるロシア人の物語である。